

山と博物館

第45巻 第9号 2000年9月25日 市立大町山岳博物館

特別展「清流に泳ぐ 大塚浩司 手作りの魚たち」

10/7(土)~11/12(日)



イワナ

大塚 浩司 作

開催にあたって

大塚 浩司

「博物館内の壁いっぱい、手作りの溪流魚を泳がせてみたら面白いだろうな。」

山岳に関する絵画や写真が中心の博物館にとつては、異例ともいえる企画をもちかけたのは五年前でした。話を聞いていただいた担当の方も、最初は「はあ、魚ですか?」と当惑気味。二〇世紀最後の個展は博物館でやろうと勝手に決め込んでいた僕は、ここで諦める訳にはいきません。山と川の関係は、切っても切れないものであるとか、ここ大町の清流に棲息するイワナやヤマメの話などを熱く語り、前代未開の作品展が開催されることとなりました。

蛇口をひねればいくらかでも水が出る時代に生きている僕たちは、川や湖との関わりも希薄になり、その大切さを認識しないまま過ごすことがほとんどです。コンクリートで固められた川の痛みを理解できる人は、いったい何人いるのでしょうか。

信州は山紫水明の地といわれ、清らかな水の流れる県民の自慢であり、命の源でもあります。清流という限られた環境にしか棲息できないイワナやヤマメを作品にして展示することで、川や湖の自然の大切さを考え直すきっかけになればいいなと願っています。

(クラフト作家)

特別展「清流に泳ぐ 手作りの魚たち」

大塚 浩 司

まずは自己紹介

博物館で作品展ができるなどということは、作家として名譽なことであり、一生のうち二度とないことだとも思うので、しっかりと自己PRします。

名前は大塚浩司。よく「おおつかこうじ」と読まれてしまうのですが、「ひろし」です。白馬村で小さなクラフトショップ「森の生活」という店を経営しながら、作品製作をしています。

一九六〇年大阪生まれ、十二才の時に白馬に引越してきたので、もう二八年間信州で暮らしています。小さい時から絵を描いたり物を作ることが大好きで、漫画家か絵描きになることを夢見ていました。

家が宿を経営していたので、高校を卒業してからは家業を手伝いながら、美大の通信教



育でデザインを学び、自作のイラストや漫画を雑誌に投稿していました。

十九歳の頃、漫画やイラストが入選したりして、ぼちぼち仕事としてやっていけるようになりまし。しかし、東京に出ないと一人前になれないといわれた時代でしたので、信州を離れたくなかった僕は、この地でもやっていけるクラフト作家の道を選んだのです。

あれから二〇〇年、「信州の自然からインスピレーションを受けて作品を作る」というのが僕の作家としてのテーマです。木工やドライフラワー、絵や版画、彫刻など、ジャンルにとらわれずに作品製作を続けています。

溪流魚の作品を作り始めてからは一〇年ぐらいでしょ。アメリカの釣りに心奪われていたトラウト(マス)の置物に心奪われ、見よう見真似で作ったのがきっかけです。

とにかく溪流釣りが大好きです。釣りの専門書雑誌に執筆していたこともあるくらいイワナやヤマメに惚れ込んでいたので、作品製作には今まで以上に真剣に取り組みました。最初は趣味として始めたのですが、今では仕事の中心になっていきます。おとしあたりからフライフィッシング(毛鉤釣り)の本場であるアメリカやニュージーランドでも常設展示されるようになったのは嬉しい限りです。

アメリカが発祥の地といってもいいフィッシュカービング(魚の彫り物)ですが、日本では、魚物を作るプロの作家はまだ数人しかおりません。信州でも数人の方が作り始められています。信州でも数人の方が作り始められています。信州でも数人の方が作り始められています。

僕もこの道を行く作家として、よりよい作品作りに励みたいと思います。

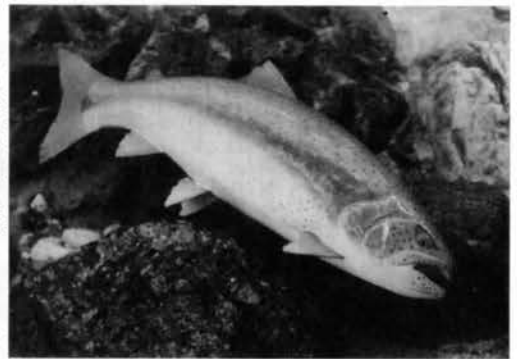


作品について

前述のように、僕は溪流釣りが好きなので、馴染みのあるイワナやヤマメ、アマゴの作品数が一番多くなります。テンカラと呼ばれる和式毛鉤釣りをしているので、魚の動きや餌の追い方、逃げ方などを長年に渡り観察してきました。また、水槽で溪流魚を飼いつけたこともあります。

製作する時には、実物の魚その物を表現するのではなく、出来る限りディフォルメして、本物以上の動きや迫力を出そうと努力しています。ですから全長に対する各部の大きさ、長さなど、実物の魚のサイズを測ることはしません。ヒレの大きさや口のあけ方も、作品により大きくしたり小さくしたりと工夫します。魚の複製品を作るのではなく、魚をモチーフにした作品を作ることに、意義があると考えています。

素材については、初期の頃は様々な木を用いていましたが、木では作品の表現に限界を感じ、現在は造形用の石塑粘土と呼ばれるものを使っています。大まかな形を作り、完全に乾燥させてから、ナイフや彫刻刀で彫りこん



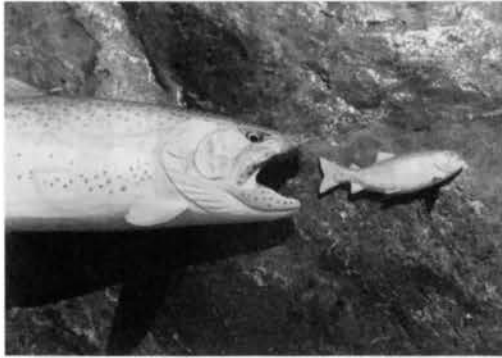
でいきます。作業行程は木彫りとまるで同じです。彫り終えた物にジェツソという下地を塗りこみ、アクリル絵の具で色をつけ、ウレタンニスで仕上げます。下地から仕上げ塗りまでは、七〇工程以上の作業を要します。出来上がった作品はすべて一点もの。同じ作品はどこにもありません。

今までに二〇〇〇点以上製作しましたが、やっとならぬ二三年の作品に、自分らしさというか、オリジナリティーが出てきたように思います。

作品を見ていただいた方に「とてもリアルですね」といっていただける様に努力を続けます。

アメリカインディアンとの交流
突然なんの話しかと思われそうだが、小さい頃からのもう一つの夢が、アメリカインディアンとともに生きることでした。

たぶん西部劇の影響でしょう、馬にまたがり荒野を駆ける彼らの姿に憧れたのです。古くから自然と共に暮らす彼らが、後からやってきた白人がいうような、悪い人であるはず

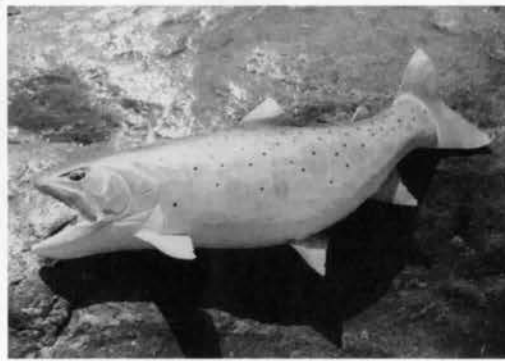


がないと子供心に考えたものです。縁があり、アメリカ中西部に住むナバホ族、ホビ族の方々と、数年前から交流しています。年に二回、春と秋にナバホのメディスマン(祈禱師)の家に滞在し、地球、あるいは宇宙全体と調和して生きる彼らから多くのことを学んでいます。妻と三人の子供たちも何度かナバホに行き、小学校に体験入学したりしています。僕たちを家族の一員として迎えてくれている、七〇歳を越えるメディスマンから、正式なナバホネームを授かりました。ナバホ滞在中は、馬で遠乗りに出かけたり、セレモニーやダンスを見学したり、家事手伝いをしながら気楽にやっています。恩返しとしてナバホの小学校で絵や工作を教えたりもしています。

地平線につながる広大な砂漠の風景と、そこに暮らすアメリカインディアンの人々との付き合いは今後も続くでしょう。ルートの旅 アメリカの話をもう一つ。シカゴからロサンゼルスに続く二四四八マイルのルート66は、一九二六年に誕生し、アメリカの発展を支え続けてきた道です。その後、州間高速道インターステートの整備が進み、役割を終えたルート66は、一九八五年にアメリカの地図上から消滅しました。しかし、古き良きアメリカの象徴でもあるルート66は、人々の心から消え去ることなく、「母なる道」として愛され続けています。僕とルート66との出会いは中学時代に、ジョン・スタインベックの長編小説「怒りの葡萄」を読んだ時です。アメリカという国に撞いていた僕は、主人公が走った道を辿ってみたいと願っていました。八つの州、三時間の時差、大都会、広大な畑、大平原、砂漠地帯、大河、山脈をつなぐオールドハイウェイ。ナバホインディアンとの交流のため、初めてアメリカに渡り、メディスマンと待ち合わせをした小さな田舎町、アリゾナ州ウィンスロー。約束した場所を探しながら車で走っていた時、この道がルート66であるとふと気付いたのです。僕が子供の頃から心に誓っていた二つの夢、「アメリカインディアンとの交流」と「ルート66の旅」が、偶然にも同時にスタートしたのでした。

四〇〇キロの道のりを、何年間もかけてじっくりとていねいに、寄り道をモットーとした旅として楽しんでいます。こちらのお話はほぼ同時進行で、新聞の情報版に現在も連載が続いています。撮りためた写真でいつか写真展も開きたいです。最後に 七月で四〇歳になりました。物を作る仕事

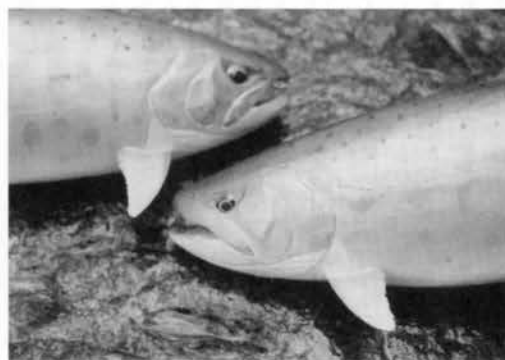
を始めて二〇年、しかも今年は世紀末の西暦二〇〇〇年。こんなにもゴロが揃う年に、歴史のある大町山岳博物館で作品展が開催でき、本当に嬉しく思います。作品を生み出すという仕事に終わりはありません。やっつの思いで手間のかかる作品に完成させた時にはもう、頭も体も次の作品に向かっている気がします。もっと迫力を出したい、もっと動きを表したいと、もがき苦しむ自分と、「まあいいや、今日はとりあえず釣りに行こう」とひたすらサボることを考えている自分とが、折り合いをつけながら一日を送っている今日この頃です。



開催にあたり親身になり協力していただいた博物館職員の方々、釣りや魚の話で盛り上がり、実物や剥製を見せていただいた白馬八方ニレ池フィッシングセンターのスタッフと常連の方々、またクラフトショップ「森の生活」を支えてくれているファンやお客さん雑誌、新聞の読者の方々、作品展に来ていただく方々、その他大勢の方に感謝しています。彼らがいなければこの作品展はもちろんのこと、僕の仕事そのものも成り立たなかったで

しょう。そしてなにより僕の家族全員に感謝します。みんなの支えがあったからこそ、自分の夢を信じ、勇気をもって前に進むことができました。心よりありがとうを言いたいです。(クラフト作家)

作家連絡先
〒三九九一九三〇一
長野県北安曇郡白馬村北城白馬町八七五三
クラフトショップ「森の生活」内
電話 〇二六二一七二七三二
ホームページアドレス <http://www.mnsr.jp/users/trout/>
Eメールアドレス trout@islands.or.jp



特別展詳細
特別展「清流に泳ぐ 大塚浩司 手作りの魚たち」
会期 一〇月七日(土)―十一月二日(日)
開館時間 午前九時―午後五時 (入場は午後四時三〇分まで)
休館日 一月六日(月)のみ休館
入場料 大人四〇〇円・高校生三〇〇円・小中学生二〇〇円
(三〇名以上の団体は各五〇円割引)
お問合せ 大町山岳博物館
〒三九八〇〇〇二 大町市大字大町八〇五六―
電話 〇二六二一七二七三二
FAX 〇二六二一七二二三三

イヌワシ飼育奮闘記 〈後編〉

横澤 志津

平成一一年九月下旬、彼らは二年目の繁殖期を迎えようとしていました。私たちは彼らが巣作りをするための巣材を集め、巣台に置きました。巣材は木の枝とススキです。その後、オスはすぐに巣材に興味を持ち始めましたが、メスの方はといえば夏の間にすっかり地面生活に戻ってしまっていたのです。餌を持って入ると、待ってましたとばかりに餌台にやってくるメスに、色気より食い気を感じてしまいました。「まったく、もう……」（私のつぶやきです）。

一月に入ると、オスは本格的に巣作りを始めました（それがちゃんと形になっているかどうかは別としてですが）。そして、一月も中旬にさしかかると、メスに変化が現われ始めたのです。餌を持って入る私たちに対して、頸羽を逆立て体を膨らませて威嚇してきます。これは明らかに前年とは違う行動でした。はたしてそれが何を意味するのかは分かりませんが、メスの気持ちに変化があったことは間違いないことのように思えます。しかし、この年は一月になってオスが一段と激しく鳴くようになって、メスは地面にいました。メスもオスのいる巣台へ行こうとしているようなのですが、羽の力がないのかもう少しというところで失敗してしまうのです。私たちは真剣にメスを上にあげる方法を考えたりもしました。オスは上からしきりにメスを呼ぶ、そんな状態が毎日毎日続いていました。

前年の一月には中段にあがっていたメスですが、この年メスの姿がモニターに映ったのは三月になってのことでした。それからのメスは、よくオスと一緒にいました。羽を引く張つてみたり、脚をつついてみたり、一緒に巣材をいじつてみたり。モニターには仲のよい二羽の姿が映っていました。また、メスが巣台から離れていると、オスがしきりに呼ぶ様子も見られました。メスもその声に反応して巣台に戻ります。これは前年には見られなかった行動です。さらには、巣台にいるメスの元へオスが餌を持って行ってあげる姿も見られました。餌を持って飛んで行き、メスの前にポトツと置いて、自分の分はまた取りに行くのです。ほのぼのとした、見ている方まで和んでしまうような、そんな光景でした。

こんなに仲のよい二羽でしたが、本来の目的である繁殖の方にはなかなか変化が見られませんでした。オスが一生懸命やっている巣作りも全然形が見えてきません。メスの後ろに回つてみたりするものの、そこから進展しないのです。メスが巣台に行くようになったのが三月になってのことですから、もう遅かったのでしょうか。私たちの間であきらめの雰囲気が出てきたのは、四月に入りオスが巣から離れるようになってきた頃です。相変わらずメスが餌を運んだりしている姿も見られましたが、オスが巣を捨ててしまった以上、もうどうしようもありません。今年も彼らの二世の姿を見ることはできませんでした。

平成二二年八月二〇日、イヌワシのメスが死亡しました。上記の記事を書いたすぐ後のことです。あまりにも突然のことに、私たちは信じられない気持ちでいっぱいでした。今年、私たちは今までよりも彼らの繁殖に期待していました。今までも早い時期から、メスが威嚇をしてきたり、オスの鳴き声が聞えてくるようになってきたり、一月頃の繁殖期突入に向けて、とてもいい感じになってきたりしたからです。

死亡する前日もメスは普段と全く変わらない様子で餌台の上に止まっていた、餌を持って入った私に頸羽を逆立て、体を大きく膨らませて威嚇してきました。私などはメスのそういう態度を見ては、「やれやれ」と言いつつも、自分を区別してくれていることに実はちょっぴり喜んでいました。そして二〇日の朝、出勤した飼育員が地面に倒れているメスを発見したのです。全く予想もしていなかっただけに言葉が失いました。



メスの死体は翌二日に松本畜産保健衛生所に依頼し、解剖検査を行っていただきました。その結果、死因は「内臓真菌症」と診断されました。これは、体が衰弱したことにより、体内に入ったカビに抵抗できず、カビが内臓で繁殖してしまうというものです。体が弱ってきていたのかもしれないと思うと、気づいてやれなかったのが悔やまれ、安らかに眠って欲しいと祈るばかりです。現在はオスが一羽残されていますが、このオスも近々仙台市八木山動物公園に帰る予定です。メスがいないと寂しそうなのですが、また仙台に戻って元気に過ごして欲しいと思います。（写真は八月一日撮影）

全てが手探り状態で、繁殖例のある動物園などにいろいろ教わりながら始めたイヌワシ繁殖計画です。よく「愛のキュービッド」といいますが相手は動物、なかなかうまくいきません。しかし、二羽の様子を見ている限りでは、年を重ねるごとにいい雰囲気になってきているようです。繁殖期に入ると一般公開を中止し、ご迷惑をおかけしておりますが、多くの皆さんの協力に感謝しつつ、彼らのいちばん近くにいるものとして、できる限りのことをしていきたいと思っています。オスが来てからのメスは随分変わりました。初めはオスより小柄だった体も今ではオスと同じくらい、いやオスより大きくなったかも知れません。飛ぶことも多くなり、餌もたくさん食べるようになりました。オスが来たことはメスにとって大きなメリットであったと思いま

（大町山岳博物館 動物飼育担当職員）

山と博物館第45巻第9号

発行 千代田 長野県大町市大字大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-二二一〇二二

FAX 〇二六-二二一〇二二

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額 一五〇〇円（送料共、切手不可）
郵便振替口座番号 〇〇四〇七三三三三